

清代の閨秀詩人王貞儀について：その「脂粉の気を除去する」説を中心に

蕭，燕婉
台湾中山医学大学応用外国語学科助理教授

<https://doi.org/10.15017/16516>

出版情報：中国文学論集. 38, pp.92-106, 2009-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

清代の閨秀詩人王貞儀について

— その「脂粉の気を除去する」説を中心に —

蕭 燕 婉

はじめに

二〇〇六年、合山究によって明清時代の文学や文化と女性とのかわりを詳細に論じた画期的な著作『明清時代の女性と文学』（汲古書院）が上梓された。その第四篇「巾幗鬚眉論」では、女子尚武の系譜が取上げられると同時に、当時は女性の「男性らしさをもった作品が高く評価される反面、逆に女性的情調をもった作品が貶められ、低く評価されていたという事実」（序文）を参照）が指摘されている。

そこで小論では、氏の論考を踏まえつつ、清乾嘉期に多方面にわたって業績をあげた閨秀詩人王貞儀（乾隆三十三年～嘉慶二年、一七六九～一七九七）を対象として、彼女の「脂粉の気を除去する」説、及びその主張に基づく創作の様相を考察していく。また、王貞儀がどのような女性を自分の生き方のモデルとしたのかにも注目しながら、女性の才能が高く評価された時代の中で展開していった才媛の精神的動向、及び清代女流文学史上における王貞儀の評価をも明らかにしてみたい。なお、本稿で引用した王貞儀の著作『徳風亭初集』十三巻は、蔣国榜編『金陵叢書』丁集に拠るものである。

一 王貞儀の経歴と著作

では、まず『清史稿』「卷五百八・列女一」から、彼女の略歴を見ていくことにしよう。

詹枚妻王、名貞儀、字徳卿。枚、無為人、貞儀、泗州人、而家江寧。祖者輔、官宣化知府、坐事戍吉林。貞儀

年十一、者輔卒戍所、從父錫琛奔喪、因僑居吉林、侍祖母董、讀書學騎射。十六還江南、又從錫琛客京師、轉徙陝西、湖北、廣東。二十五歸於枚、後五年、嘉慶二年、卒。

詹枚の妻、王、名は貞儀、字は德卿。枚は、無為の人、貞儀は、泗州の人にして、江寧に家す。祖は者輔にして、宣化知府に官たるも、事に坐して吉林に戍す。貞儀、年十一にして、者輔、戍所に卒し、父錫琛に従い奔喪して、因りて吉林に僑居し、祖母董に侍し、書を読み騎射を学ぶ。十六にして江南に還り、又、錫琛に従い京師に客たりて、陝西、湖北、廣東に転徙す。二十五にして枚に歸ぎ、後五年、嘉慶二年に、卒す。

王貞儀の夫は詹枚、字は文木、在野の文人であつた。祖父王者輔（一七八二）は海豊（山東省）県令、宣化（河北省）知府などを歴任した人物である。幼いころから、彼女は祖父の豊富な蔵書を涉獵し、幅広く知識を吸収したといふ。

王貞儀の生涯を通観してみると、まず、住居は江蘇省江寧にあつた王貞儀が、少女期に父に従い、祖父の死をともむらうために吉林省に奔葬したことが注目される。

『徳風亭初集』卷十所収の「吉林雜作」、「吉林雜詩二首存一」、「吉林塗中」のような異様な迫力に満ちた詩は、清代女性の記した東北吉林の風土、飲食、風俗などの資料としても価値がある。次に、彼女が吉林の松花江で暴風雨に遭遇した際に、雷が轟き、空一面を砂埃が覆う北方の厳しい氣候風土を詠じた詞「踏莎行松花江望雨」（『徳風亭初集』卷十三）を挙げることにする。

黒水驚流、黃雲隱霧、迷茫新翠埋千樹。

黒水は驚流し、黄雲は霧を隠す。迷茫たる新翠 千樹に埋む。

片帆剛渡半江煙、不知何処吹來雨。」

片帆剛めて渡る 半江の煙、知らず何れの処より雨を吹き來たるや。

噴雪濤飛、搏沙風駐。翻盆掛瀑橫空佈。

噴雪 濤は飛び、沙を搏ちて風駐まく。翻盆の掛瀑 空を横さまに

風波如此棹回船、猩紅一線雷車舞。」

佈がり。風波此の如く 回船に棹させば、猩紅の一線 雷車舞つ。

この吉林省滞在をきつかけに、王貞儀はト太夫人に師事し、更に白鶴仙、陳宛玉、吳小蓮といった才媛たちとの知的な交遊の機会に恵まれたのだった。ト太夫人とは、陳淪齋侍御の妻、ト謙父である。陳淪齋は王者輔と親密な交友関係にあつたが、王貞儀らが吉林に滞在している時に、ちょうど陳淪齋が吉林に派遣されたのである。そのた

め王貞儀は卜太夫人と知り合うことができた。白鶴仙は大興（北京）の人で、広西桂林の役人胡宗緒の妻である。胡宗緒は海賊の事件に巻き込まれたため、吉林に流され、それに妻の白鶴仙も随行した。陳宛玉は卜謙文夫人の孫娘である。吳小蓮の履歴は不明である。

また吉林にいた時に、王貞儀はモンゴルの阿將軍の夫人の教えにより、騎馬と射撃の技を身につけている。つまり、彼女は淑やかな才女であるとともに、因習にとらわれない自由闊達な女性でもあったのである。

王貞儀には『徳風亭初集』十四卷、『二集』六卷、『術算簡存』五卷、『星象図釈』二卷、『象数窺餘』四卷、『文選詩賦參詳』十卷、『編帙餘箋』十卷、『籌算易知』、『重訂策算証訛』、『西洋籌算増刪』、『女蒙拾誦』、『沈疴嚙語』各一卷などの著書があった。わずか三十歳で卒した彼女は、天文、曆算、医学など、広い分野にわたる専門知識を有し、尋常ならざる才能を発揮しており、中国の天文曆算史に名を残す数少ない女性の一人でもあった。

しかし残念ながら、現存する王貞儀の著作は、『徳風亭初集』文九卷、詩三卷、詞一卷のみに過ぎない。『徳風亭初集』十三卷の伝来に関して、安徽省桐城の古文家蕭穆は『敬孚類稿』卷十三「女士王德卿伝」で次のように述べている。

将歿、謂其夫文木曰、君門祚薄、無可為者。妾今先死、不為不幸。吾生平手稿、其為我尽至劄夫人。劄夫人能彰我於身後者也。夫如其言。劄夫人総為一縑、囊珍襲之、時嘉慶二年也。後六年、嘉興錢衍石給諫訪其姑劄夫人、於黎里得諸稿本。

將に歿せんとして、其の夫文木に謂いて曰く、「君の門は祚薄くして、為すべき者無し。妾の今、先に死するは、不幸と為さず。吾が生平の手稿は、其はくは我が為に尽く劄夫人に至せ。劄夫人は能く我を身後に彰らかにする者なり」と。夫、其の言の如くす。劄夫人、総じて一縑と為し、囊珍して之を襲す、時に嘉慶二年なり。後六年にして、嘉興錢衍石給諫、其の姑劄夫人を訪れ、黎里に於て諸稿本を得たり。

劄夫人とは、劄嘉珍の妻錢与齡（一七六三—一八七二）である。錢与齡は沈德潜と並んで「東南二老」と称せられた錢陳群の孫女である。錢陳群の母陳書は乾隆期の有名な女画家であった。錢与齡も幸いに陳書の伝授を得て、詩だけでなく、画をも善くした。王貞儀は自分の著作を錢与齡に珍藏してもらったことで、閨秀詩人としての名をとど

ろかす希望を女性に托した好例を示してくれた。

嘉慶の進士で、当時諫官であつた錢儀吉（衍石）は、王貞儀の著作を読んで、「其詩文皆質実説事理、不為藻采」（其の詩文は皆質実にして事理を説き、藻采を為さず）（衍石齋記事稿 卷三「術算簡存序」と評している。更に、道光の挙人朱緒曾は咸豐五年（一八五五）、儀吉の弟泰吉を通して『徳風亭初集』を手に入れ、はじめ『金陵詩徵』に編入したといふ。¹⁰⁾

二 王貞儀の文学主張

先に取り上げた錢儀吉による王貞儀の詩文の評価を読むと、彼女の詩文には、道理を述べ、麗辞の使用を戒める傾向があつたことが窺える。王貞儀の著作意識をより深く理解するために、まず彼女が当時の閩秀詩人の詩文を評価した際の基準となるものを、いくつか掲げて検討することしよう。

安徽省桐城の人で、官は文華殿大学士に至つた張英の娘張令儀について、王貞儀は「姚母張太夫人伝」（徳風亭初集 卷二）において「巾幗而有鬚眉志、太傅異而愛之、……、為詩文皆近於古、無香奩之派」（巾幗にして鬚眉の志有り、太傅、異として之を愛す、……、詩文を為るに皆古に近く、香奩の派無し）と述べている。女性でありながら烈々たる「鬚眉の志」を持ち、さらに男女の情愛を詠じる艶詩から脱却している張令儀の作詩趣向は、大いに賞讃されている。

なお王貞儀は、閩秀詩人周載芳の男性を圧倒するよつな詩についても、「以夫人之所作、直可方于鬚眉而比」（夫人の作る所を以て、直ちに鬚眉に方して比すべし）（徳風亭初集 卷一「周夫人詩集序」と高い評価を与えている）。

一方、王貞儀の詩は友人胡慎容の妹によつて、女性ならではの感性を失つていのではないかと注意されたことがある。¹¹⁾ この意見に対して、王貞儀は胡慎容宛ての手紙において、次のように強く異議を申し立てている。「正愧不能尽去閨閣之面目、而不意令妹夫人之教余者、反在是也。此則尚祈夫人轉達令妹、急留意古歌詩中、細為講論思索其法律格調、俾他日樹閨中之幟」（正に閨閣の面目を尽くは去る能わざることを愧ずるに、而も意わざりき令妹夫人の余に教つる者の、反て是に在りとは。此に則ち尚祈すらくは夫人、令妹に轉達せよ、急ぎて意を古歌詩の中

に留め、細かく其の法律格調を講論思索するを為して、他日閨中の幟を樹たしめよと。(『徳風亭初集』卷四「答胡慎容夫人」)。

王貞儀が友人の妹の意見に忌憚なく反論しているところには、その烈しい性格がよく現われていると思われる。また、彼女の「格律を重んじる」という意見から、その作詩主張は詩の風格と音調の典雅とを尊ぶ沈徳潜の格調説に近いことが認められよう。因みに、彼女は文章について「蓋文章一道、断不可無故而作、……必有道以寓乎其中、為文也、或忠烈、或節義、……此所謂文以載道也」(蓋し文章の一道は、断じて故無くして作るべからず、……必ず道の以て其の中に寓すること有りて、文と為るなり、或いは忠烈、或いは節義、……此れ所謂「文は以て道を載す」なり。)(『徳風亭初集』卷四「答方夫人第一書」)と明らかに載道の立場を掲げている。したがって、精神の自由を尊び、「主情的」文学を唱えた袁枚とは違って、王貞儀の執筆態度は嚴肅を極めたもので、伝統的な儒家理念を重視する傾向が強かったと言える。

ところで、女性が文学に携わる時、男性的要素が重視された理由として、合山究は次のように指摘している。⁽¹²⁾長い間、女性は文学の世界から排斥されていたために、文事は男性の職分であるという意識が女性の心に固く残っていた。そのため、女性は男性の文芸を学ぶ時、男性文芸への同化を目指し、男性的な雄大な氣象が重視されたのである、と。

疑いもなく当時王貞儀は群を抜いた閨秀詩人であった。相当な優越感を持っていた彼女は「然性孤僻、不能接納名媛才女、相与講論、而目前之所称名媛才女者、亦不足以究学問、……、所謂蹢躅涼涼、自笑以為殆閨中之狂士也」(然れども性、孤僻にして、名媛才女を接納して、相与に講論する能わず、而も目前の名媛才女と称する所の者は、亦た以て学問を究むるに足らず、……、所謂蹢躅涼涼にして、自ら笑いて以為らく、殆んど閨中の狂士なりと。)(『徳風亭初集』卷一「周夫人詩集序」)と、今の才媛の学問は取るに足りないものだど手厳しく批判している。自ら孤高にして「閨中の狂人」であることを自負している。

あくの強い個性に徹した王貞儀は「上徐静雍夫人書」(『徳風亭初集』卷四)で「儀也頑拙、平生頗以氣節自恃、又不屑依違脂粉香艷鄙俗之習、是以誉始興而毀旋起、而不免忌刻排擠」(儀や頑拙にして、平生頗る氣節を以て自ら

恃み、又脂粉・香艷・鄙俗の習に依違たるを屑しとせず、是を以て誉れ始めて興るも毀り旋ち起りて、忌刻排擠を免れず。」と、艶かしい「女性らしい」詩風に染まるのを潔しとしないがために、人々に排斥された事情を述べている。当時、世間の王貞儀に対する評価は、毀誉褒貶半ばしていたらしいが、『徳風亭初集』を調べた限りでは、彼女と文学を介しての交遊関係のあった主な才媛は、上に取り上げた胡慎容と周載芳、及び吉林で知り合った閨秀詩人たちのほかに、随園女弟子の駱綺蘭（『随園女弟子詩選』卷三・陳淑蘭）（『随園女弟子詩選』卷四）・徐裕馨や安徽省出身の許燕珍などが挙げられる。

三 王貞儀の詩について

では、王貞儀はその文学主張に基づいて、どのような詩を詠んできたかを検討してみよう。彼女は「題架上鷹」（『徳風亭初集』卷十）において、「縮項坐秋風、雄心冷如鷲、何時脱錦鞵、怒翻摩霄去」（項を縮めて秋風に坐し、雄心は冷きこと鷲の如し、何れの時にか錦鞵を脱し、怒翻して霄を摩し去らん）と詠じ、鷹の姿に自己を投影している。いつの日か果てしない空に飛び立とうとする鷹の逸気、それは、人間世界に埋没することを肯じない彼女の強烈な願望の反映であろう。

また彼女は、広い世界に対する憧憬と、それがかなえられないことへの焦燥感を、「題女中丈夫図」という生涯の雄篇で詠している。

- | | | | |
|------------|---------------------|-------------------|------------------------|
| 1 君不見 木蘭女 | 娉婷弱質隨軍旅 | 君見不 | 木蘭女、娉婷弱質にして軍旅に随い、 |
| 3 代父從軍十二年 | 英奇誰識閨中侶 | 父に代りて從軍すること十二年、英奇 | 誰か識る 閨中の侶なるを。 |
| 5 又不見 大小喬 | 陰符熟讀諳鈴韜 | 又見不 | 大小喬、陰符を熟読し 鈴韜を諳んじ、 |
| 7 一十三篇同指授 | 不教夫婿稱雄豪 | 一十三篇 | 同に指授せられ、夫婿をして雄豪を称せしめず。 |
| 9 得毋記載真非果 | 記載無きを得るも | 真に果に非ざるか。 | |
| 10 誰把虚声讓婀娜 | 誰か虚声を把りて | 婀娜に讓らん。 | |
| 11 当時女傑徒聞名 | 当時の女傑 徒らに名を聞くのみにして、 | | |

12 每恨古人不見我 毎に古人の我を見ざるを恨む。

詩の冒頭の部分では、木蘭や大喬・小喬の、兵法に通じた「巾幗英雄」としてのイメージを際立たせた上で、彼女たちの名前が史書では無視されていることに不平を鳴らしている。続いて、王貞儀は「女中丈夫」をモチーフとした画を見ながら、女丈夫の勇氣と雄々しさを存分に發揮した活躍ぶりについて次のように想像している。

- 13 竭来忽親傾城色 竭来 忽ちに親る 傾城の色、
14 青娥冶貌憑調墨 青娥 冶貌 調墨に憑る。
15 恍然驚詫女票姚 恍然として女票姚なるに驚詫す、
16 擲戟揮戈情自得 戟を擲し 戈を揮い 情自得す。
17 梅肢柳領芙蓉面 梅肢 柳領 芙蓉の面、
18 裳繫鸞環腰宝劍 裳に鸞環を繫げ 宝劍を腰にす。
19 莫邪為婦干将夫 莫邪は婦為り 干将は夫たり。
20 霜花繡出龍班艷 霜花 繡い出して 龍班 艷かなり、
21 乍看疑是虞兮妝 乍ち看る 是れ虞兮妝なるかと疑い、
22 对面猶疑轟隱娘 対面して 猶お轟隱娘なるかと疑う。
23 翩翩體態輕堪拳 翩翩たる體態 軽くして拳ぐるに堪え、
24 叱咤心生口舌香 叱咤せば 心に口舌の香を生ずべし。
25 鳩纒鳳履襪無塵 鳩纒 鳳履 襪に塵無く、
26 意氣昂藏絶少倫 意氣昂藏し 絶えて倫少なし。
27 豈是綵旂出女帥 豈に是れ 綵旂より女帥を出すか、
28 還猜錦繖采夫人 還た猜す 錦繖より夫人を出すかと。
29 冰盈犀甲寒凝鉄 氷 犀甲に盈ち 寒くして鉄を凝らし、
30 紫塞黄沙風慘烈 紫塞の黄沙 風慘烈たり。

31 美人小隊出郊原 美人の小隊 郊原より出で、

32 笑指晴臯鷹集劣 笑いて晴臯に鷹の集劣するを指さす。

33 習武帰来不掛弓 武を習い 帰り来れば 弓を掛けずして、

34 臉波愁膩粉光融 臉波 愁膩 粉光融けたり。

35 丁香双叩錦袜纈 丁香を双叩し 錦袜を纈し、

36 羽衣未脱胭脂紅 羽衣 未だ脱せずして 胭脂紅なり。

第十五句の票姚とはもと漢代將軍の名号であるが、霍去病が票姚校尉となつてからは、霍去病の專称となつた。

この段落では、王貞儀は女丈夫の綺麗な容貌よりも、男性以上の意気軒昂たる精神、軍事上の才能に光を当てることで、男女逆転の世界を見事に築き上げている。しかし、第三十五句と三十六句からわかるように、武芸を習つた後の女丈夫は、画家の手によつて、綺麗に着飾つた女性として描かれている。王貞儀は、画家の遊戯的な創作態度に対する不満や、このまま雌伏に甘んじてはられないという胸に湧き起こる焦燥感を、次のように歌つた。

37 因思画工大有意 因りて思ふ 画工は大いに意有りて、

38 偶仮娥眉作游戲 偶たま娥眉に仮りて游戲を作すと。

39 不然拔舞豈無人 然らずんば 拔舞 豈に人無からんや、

40 何須更做公孫器 何ぞ更に公孫器に做うを須いん。

41 時平将士老良才 時平の将士 老いたる良才のごとく、

42 徒使閨媛歎落埃 徒らに閨媛をして落埃を歎かしむ。

43 可憐学書不学剣 憐れむべし 書を学びて 剣を学ばざれば、

44 途窮斫地歌不哀 途窮まり 地を斫ちて 不哀を歌う。

45 我觀此卷翻然失 我れ此の巻を観るに 翻然として失す、

46 百事不能較人一 百事 人に一も較ぶ能わざればなり。

47 伏雌縮蝟徒自慙 伏雌縮蝟するを 徒らに自ら慙するも、

48 壮情往復懷芳姑 壮情往復して 芳姑を懐く。

第四十四句は、老いた杜甫が、自分と同様に不遇の青年王郎に深い同情を寄せた「短歌行贈王郎司直」詩の「王郎酒酣拔劍斫地歌莫哀」（王郎酒酣にして劍を抜き地を斫つて莫哀を歌う）（杜詩詳注 卷二十一）という表現を踏まえたものである。詩の後半の部分では、彼女が幼い頃から大志を抱き、北方の峻烈な風土に接しながら、化粧の手をとめては、手綱をとり豪快に乗馬するさまがユーモラスに語られている。更に、江南に戻つても書物を手から離そうとせず、男性文人との同化を望むかのように行動した彼女は、やはり一人の「丈夫」だったのである。

49 憶昔歷游山海区 憶つ昔 山海の区を歷游し、

50 三江五岳快攀途 三江五岳 快く途を攀す。

51 足行万里書万卷 足は万里を行き 書は万卷、

52 嘗擬雄心勝丈夫 嘗て擬す 雄心は丈夫に勝ると。

53 西出臨潼東黒水 西は臨潼より出で 東は黒水、

54 策馬驅車幼年喜 馬に策し 車を驅るを 幼年より喜ぶ。

55 亦曾習射復習騎 亦た曾て射を習い 復た騎を習い、

56 羞調粉黛逐騎靡 粉黛を調え騎靡を逐うを羞ず。

57 归来換我襦衫輕 歸り来れば 我が襦衫の輕きに換え、

58 幼車重開亦有情 幼車重ねて開けば亦た情有り。

59 復爾貞吉事中饋 復爾として貞吉にして中饋を事とし、

60 猶然佔畢如書生 猶然として佔畢すること書生の如し。

61 滿耳紛紛聽揚播 滿耳紛紛として 揚播を聴くに、

62 未必名聞可虛座 未だ必ずしも名聞は虚しくは座すべからず。

63 秦姬趙女誇妍華 秦姬 趙女 妍華を誇り、

64 相逢大抵嬌無那 相逢うは 大抵 嬌 那ともする無し。

第五十一句と五十二句は、彼女の颯爽とした鮮烈なイメージをよく伝えるものとして世に知られている。第六十句の佔畢は書物を読むの意である。そして、詩の最後では再び女丈夫の画に焦点を合わせ、

65 吁嗟乎、画中人孰能同　　吁嗟乎　画图中の人　孰か能く同じからん、

66 丈夫之志才子胸　　丈夫の志　才子の胸。

67 始信鬚眉等巾幗　　始めて信ず　鬚眉の巾幗に等しきを、

68 誰言兒女不英雄　　誰か言う　兒女は英雄ならずと。

と強い反語を以て、自身の姿を画中の女丈夫と重ね合わせ、「鬚眉」なる男子と拮抗しようとする逞しい気概をよく表わしている。このように、文学の想像世界において、彼女は禁じられた男性の公的空間に自由に入し、女性の抑制された欲望を一気に迸らせると同時に、激しく鬱結していた内面の心情をも開放していたのである。

いま一つ注目し値する問題がある。清の閨秀詩人沈纒は「題二喬觀兵書図」（『翡翠樓詩集』、『吳中女士詩鈔』所収）に、「餘艸焚尽仗東風、心借奇謀閨閣中。曾把韜鈴問夫婿、誰言兒女不英雄。陰符偷讀妨描黛、繡帙双開見唾絨。一十三篇是指授を勞し、礪礪の餘烈は本より吳宮。」と詠じている。比較してみると、沈纒作の第四句・第七句と、王貞儀作の第六十八句・第七句とは、殆ど同じである。そのほか、沈詩の第五句と王詩の第六句も酷似しており、更に第二句も、王詩の第八句と同じく、女性の才智は男性に凌駕するという趣旨になっている。

沈纒は字は蕙孫、また散花女史、戯曲作家沈起鳳（一七四一～一八〇二）の娘である。彼女は吳中十子の一員であるため、『翡翠樓詩集』、『編餘集』の著作は、乾隆五十四年刊行の『吳中女士詩鈔』に収められている。吳県に在籍する女流詩人の選集『吳中女士詩鈔』は、リーダー的な存在である張滋蘭及び彼女の夫任兆麟によって編集されたものである。任兆麟は在野の文人として考証学を治めていたが、沈徳潜門下の王鳴盛・錢大昕といった当時の大学者との交遊が深かった。

沈纒の生卒は不明であるが、王貞儀とほぼ同時期に活躍した才媛であった。二人の著作を調べる限りでは、互い

の交流の跡は見出せないのだが、『吳中女士詩鈔』の梓行が『徳風亭初集』より早いことは、疑いのない事実である。では、果たして王貞儀は『吳中女士詩鈔』を読んだのだろうか。王貞儀は「題吳中任生蘇庵詩稿後」(『徳風亭初集』巻十二)で、『吳中女士詩鈔』の編集者任兆麟の息子任蘇庵の詩を称えている。また吳中十子の陸瑛が詠んだ「不堪多病逢長夜、況復懷人正暮秋」の詩句を王貞儀は「神韻あり」と評価し、さらにその詩句を踏まえて「正值懷人秋又暮、那堪多病夜初長」と改作している。したがって、王貞儀は、著作の中で直接『吳中女士詩鈔』に触れていないにせよ、恐らくこの詩集を知っていたのではないかと推測できる。

ところで、文学における独創性をどう評価するかという問題はさておき、かりに王貞儀が沈纘の律詩「題二喬觀兵書圖」から四句を切り取ったのだとしても、彼女は雄渾な筆力で「題女中丈夫圖」という長編において、大喬、小喬をはじめ、木蘭、聶隱隱、虞姬といった戦場で自らの生を輝かせた女性に並々ならぬ敬慕の思いを寄せ、意識的に彼女たちの生き方を謳歌している。更に単に文学の世界に空想の羽を広げただけではなく、詩の中で自分の真実の経歴を証拠として挙げ、自らを鮮烈な輝きを放っている巾幗英雄の系譜に繋げることに成功したと認めざるを得ないだろう。

四 強烈な自己実現の夢

強烈な自己実現への願望をもった王貞儀は「感賦」(『徳風亭初集』巻十)で、自己の人生の理想に対する欲求を次のように歌い上げている。

1 抜劍欲舞室 我非聶隱娘

劍を抜きて室に舞わんと欲するも、我は聶隱娘に非ず。

3 張琴待鼓曲 我非漢女滄

琴を張り曲を鼓せんと待つも、我は漢女滄に非ず。

詩の冒頭の部分で王貞儀は、再び自分が憧れを寄せる人物を登場させ、縦横無尽に刃物を振うテロリスト聶隱娘や、漢水のほとりで音楽のリズムに乗って乱舞する神女を羨む心情を吐露している。彼女たちのように自己の活躍の場を見出すことができなかった王貞儀は、その挫折感を紛らわせるために、夢の中で理想的な仙界に自らの精神を自由に遊ばせ、儒教社会の重い桎梏から解放されたかのように詠っている。

5 願言夢遊仙 飄然駕鸞鳳

願わくは言に遊仙を夢み、飄然として鸞鳳に駕せん。

7 桃花春浪碧復碧 輕雲飛越過三湘

桃花 春浪 碧く復た碧く、輕雲を飛び越えて 三湘を過ぐ。

9 如乘蝶翅下瀛海 六銖衫底行鸞鷲

蝶翅に乗ずるが如く瀛海に下り、六銖衫底 鸞鷲行く。

11 采采朱蘭翠水浦 紫瓊盤裏烹霞光

采采たる朱蘭、水浦に翠たり、紫瓊盤裏に霞光を烹る。

13 青禽化却鸚鵡楹 金蓋翦作芙蓉裳

青禽は鸚鵡の楹に化却し、金蓋は芙蓉の裳に翦作す。

15 丹顏漆髮独難老 廣寒天闕随翱翔

丹顏 漆髮 独り老い難く、廣寒の天闕 随いて翱翔す。

彼女は夢の中で鳳凰を御し、何ものにも妨げられない飛翔を楽しみ、美しい自然と戯れている。天空からは、朱蘭・翠水・紫瓊・青禽・金蓋と目まぐるしいばかりに多様な色彩が次々と目に飛び込んできて、華麗な仙界の絵巻が見事に繰り広げられている。第十五句と十六句は、仙人のように年を取らずに積極的に生きんとする希望、及びその自由無碍な生活を賛美したものである。

しかし、結局仙人に出会うことは果たせず、第二十一句と二十二句の、最後に幻滅を知った時の沈痛な心の叫びには、彼女のやり場のない鬱屈した悲哀が込められているかのようである。

17 吁嗟乎 神仙殤去已幾許

吁嗟乎 神仙 殤去してより已に幾許ぞ、

18 空勞服食求瓊漿

空しく服食を勞し 瓊漿を求む。

19 一時尸蛻等秋草 誰冶金棺葬玉房

一時に尸蛻すれば秋草に等しく、誰か金棺を治め玉房に葬らん。

21 不若邈世飲醇酒 醉消三万六千場 若かず 世を邈れ 醇酒を飲まんには、酔うて消さん 三万六千場

かつて李白は「百年三万六千日、一日須傾三百杯」(百年 三万六千日 一日 須らく傾くべし三百杯) (李白集 校注 卷七「襄陽歌」)と酒への愛をうたったが、王貞儀は空想の世界において希望と絶望の調子を取り混ぜて「醉消三万六千場」と高唱し、酒によって胸の内なる悲哀を晴らそうとしたのだった。

王貞儀と詩的交際のあつた袁枚の女弟子駱綺蘭は、「小年性格愛豪粗、惹得人称女丈夫」(小年より性格、豪粗を愛す、惹き得たり、人の女丈夫と称するを) (聽秋軒詩集 卷一「自嘲」)と、柔順な女性とは異なる「女丈夫」という自分の形象を誇りにしていた。彼女もまた「紀夢詩」八首(聽秋軒詩集 卷二)において、「夢入層霄上、星冠著羽

裙」(夢に層霄の上に入り、星冠、羽裙を著く)(その二)、「夢作青衿客、徵才赴選場」(夢に青衿の客と作り、才を徵せられて選場に赴く)(その三)、「夢領貅貅隊、櫂槍掃霧羶」(夢に貅貅の隊を領し、櫂槍、霧羶を掃う)(その七)と詠じている。これらの詩句が示すように、駱綺蘭は夢を記した詩を通して、仙人になること、科擧を受験すること、戦場で戦うことなど現実には充足できない願望を吐露したほか、男性にしか従事できない分野にも挑戦せんとする態度を見せている。夢の中の清代才媛は、儒教社会が女性に加えた桎梏から解放されたかの如く、体も心も恣に飛翔し、堂々たる自信と活発な行動力によって自己実現の欲望を表現している。したがって、錚々たる清代の才媛にとって夢を詠じることの意味は、単に自分の願望充足だけにとどまらず、心に秘めた理想的な世界を求めめるための「遠遊」への切なる渴望であつたと看做すこともできるのである。⁽¹⁶⁾

終わりに

以上王貞儀の詩文の中から比較的よく知られたものをいくつか取上げて検討してみたが、その特色をまとめるならば、いたずらに華麗な修辞を施すことなく、勇壮豪快な表現がなされ、高揚した感情が躍動していることである。袁枚は『随園詩話補遺』巻八の三十四において彼女の「過潼関」、「登岱」、「辰沉道中」といった叙景の詩を取上げて「俱有奇傑之氣、不類女流(俱に奇傑の氣有りて、女流に類せず)」と称揚している。こういつた北方の大自然の威容を詠じた王貞儀の「不類女流」の作品は、袁枚の女弟子たちをはじめ、当時多く輩出した閩秀詩人らによつて醸成された清乾隆期を代表する繊細柔美な詩風とは、また異なつた一境界を開いたと考えられる。

「題女中文夫図」詩の如く、王貞儀はしばしば儒教道德の要求する幽閑貞静な性格とは全く乖離した女性に深い思いを寄せ、轟隠娘のような勇武で豪快な女性を自分の生き方のモデルと考えたであろうことは想像に難くない。女性が武器を手にするというその激しい行為が象徴するように、清代の才媛の胸裏には、性差にまつわるあらゆる因習を乗り越え、家父长制文化に挑戦しようとする高揚した精神が躍動していたのである。

清代の文学環境から考えると、王貞儀は確かに女性として傑出した存在ではあつたものの、決して特異な存在ではなかつた。というのは、明清時代には尚武の女性が夥しく実在していたし、このような女性をモチーフとした戯

曲、小説、弾詞も数多く作られていたからである。特に、女性の手になる女子尚武の文学作品は、女性「筋力不足弱者、男性に従属した存在、というイメージを打ち破ろうとしただけでなく、男性の独占する公的領域への懐れの気持ちをも漏らしたものと思われる。したがって、「丈夫の氣象」に満ちた詩風を目指し、男性的価値基準にかなり傾斜していた清代才媛の文学主張は、実は、文学の世界において男性を凌駕しようとする彼女たちの誇り高い自己肯定の声にはかならなかったたのである。

一方、角度を変えて考えるならば、女性たちが文学創作に際して女性ならではの表現力を伸ばすことなく、専ら男性的な風格に倣ったために、かえって女性の文芸活動を阻害することにもなった。しかも女性の立場からひたすら女性的情調をもった作品を貶めることは、自らのジェンダーに対する不満を表しているようでもあり、家父長制文化の制約の下に置かれた才媛のどうにもならない遺憾の情を反映したものとも思われる。

かくのごとく、王貞儀の脂粉の気を除去する文学観は、女性意識による主体性の追求とまではいかなかったものの、以上述べてきた清代才媛たちの複雑な精神的動向を如実に反映したものとして、清代の社会文化とジェンダー問題を新たに考える際には、無視できない問題を提示するものであろう。

注

- (1) 合山究は『明清時代の女性と文学』（汲古書院、二〇〇六年）第四篇第一章「明清時代における巾幗鬚眉の系譜」で、王貞儀について触れている。
- (2) 王者輔に関しては、『備修天長原志稿』（『中国方志叢書』成文出版社）巻八上を参照。
- (3) 『徳風亭初集』朱緒曾（述之）の跋文に「先大父惺齋公読書記云、吉林捐館、手蔵書七十五櫃、徳卿護持而涉獵焉」とある。
- (4) 『徳風亭初集』巻十二「題女中丈夫図」詩の注に「余年十一、侍先大母董太恭人之吉林、遂偕白鶴仙、陳宛玉、吳小蓮諸女士、讀書于卜太夫人之門」とある。

清代の閨秀詩人王貞儀について

- (5) 『徳風亭初集』 卷一「陳宛玉女史吟香樓詩集序」の記述を参照。
- (6) 『徳風亭初集』 卷一「送白太夫人婦大興序」の記述を参照。
- (7) 『徳風亭初集』 小伝に「貞儀……字射於蒙古阿將軍之夫人、発必中の、跨馬如飛」と。
- (8) 王貞儀の名は、諸可宝編『疇人伝三編』 卷七に収録されている。
- (9) 蒋宝龄『墨林今話』 卷十「钱九英得南楼老人传授」の内容を参照。
- (10) 朱緒曾『開有益齋讀書志』 卷五「徳風亭初集」の記述による。王貞儀の詩は朱緒曾編纂の『金陵詩徵』 卷四十七に収録されている。
- (11) 『徳風亭初集』 卷四「答胡慎容夫人」に「昨日更接令妹夫人札、……彼来書中又有論儀之詩太勁潔、不免失閨閣本來面目」とある。胡慎容は袁枚の詩友胡天游（稚威）の妹である。著作に『紅鶴山莊詩鈔』 二巻があり、蒋士銓の序文が附されている。
- (12) 合山究著、前掲書第四篇第二章、五八九ページの論述を参照。
- (13) 『徳風亭初集』 卷十に「謝句容駱秋亭女士寄惠洋箋」、卷十一「丁未至日周素修、張亜雲、陳淑蘭三夫人同過冷韻軒留飲聯句」、卷十一「送別徐姐裕馨回錢塘」、卷十一「月下同許燕珍夫人作」がある。
- (14) 清の乾隆期に、江蘇呉興の女詩人張滋蘭・張芬・陸瑛・李嫩・席憲文・朱宗淑・江珠・沈纘・尤澹仙・沈持玉は「呉中十子」と号し、「清溪吟社」を結び、「呉中女士詩鈔」を刊行した。彼女たちの詳しい履歴は、梁乙真『清代婦女文学史』（中華書局出版）第二編第七章「呉中七子」を参照。乾隆年間刊の『呉中女士詩鈔』は現在東京大学図書館に所蔵されているが、梁乙真『清代婦女文学史』と胡文楷『歷代婦女著作考』では「呉中十子詩鈔」に作る。
- (15) 『徳風亭初集』 卷十二に「秋夜病中、読呉中女士陸瑛懷女伴詩、内有不堪多病逢長夜、况復懷人正暮秋一聯、極有神韻、因略用其語而另統成律」詩がある。王貞儀が読んだのは陸瑛の『賞奇樓蠹餘』（『呉中女士詩鈔』所収）「秋夜懷婉兮、清溪諸同学」詩である。
- (16) 鍾慧玲「深閨星空——清代女作家記夢詩探論」（『漢学研究』第二十七卷一期、二〇〇九年三月）を参照。
- (17) 合山究著、前掲書第四篇第二章第五節五九二ページの論述を参照。